

【論文】

三木家と姫路藩主・元家老との

文化的交流について

山崎 善弘

はじめに

私は拙稿¹⁾において、大庄屋三木家文書中の文政六年一月「諸御用日記」を素材として、神東郡辻川組の大庄屋三木家の職務の一端を明らかにした。

その後も引き続き大庄屋三木家の職務の実態を示す史料群を分析し、大庄屋三木家の職務の実態を解明し、姫路藩の大庄屋制の全貌に迫ろうとしている。

その過程で目にしたのが、大庄屋三木家文書中の天保八年一月より「諸事控 四番」である。この史料は大庄屋三木種之助の職務などに関する日記であり、彼が辻川組で担っていた職務の実態などが具体的に知られる。ただし、彼はわずか一二歳で大庄屋に就任し、しかも病弱であったようで、分家の三木武八郎が後見を務めていた。その関係からか、同史料には「諸御用日記」ほどには大庄屋として

の職務について詳細に記されていない。もちろん、大庄屋としての職務について全く記されていないわけではないので、それらについても注目する必要があるが、今回はむしろそれ以外の記事に注目したい。

三木家が地域文化の担い手としての役割を果たしており、なかでも種之助は詩や書画の才能に恵まれて精力的に活躍した人物であったことはすでに『福崎町史』二 本文編Ⅱ（竹下喜久男執筆分、一四〇〜一九四頁、兵庫県福崎町、一九九五年）で注目されているが、彼と文人の交流や周辺地域の民衆との交流が中心に描かれており、武士、しかも藩主や家老といった上級武士との交流については言及されていない。しかし、彼は大庄屋としての職務をこなす傍らで、詩や書画の才能に恵まれていたことで、当時の姫路藩主酒井忠学や同藩の元家老河合寸翁（道臣）とも交流することがあったのである。

「諸事控 四番」の中から、こうした事実を示す記事を紹介することで、従来知られていなかった三木家と姫路藩主・元家老の文化的交流について明らかにしたい。その際、まず、種之助と文人の交流（これに関する記事も同史料による）について見ることで、彼の文人としての性格に迫り、それを踏まえた上で、彼と忠学・寸翁の交流について見るといふ手順を踏むことにする。

なお、種之助の文化的活動の成果がいかほどであったかについては、彼の作品を取り上げて分析を行う必要があるが、彼の作品を含む大庄屋三木家文書の一部は、しばらく大阪大学大学院文学研究科 懷徳堂研究センターに寄託されており、この度、改めて福崎町へ寄贈されたばかりである（一部は三木家へ返却された）。まだ整理も終わっていない段階であり、彼の作品を取り上げての分析は他日を期す他はない。ただし、彼と忠学や寸翁との交流の中に、彼の文化的活動の成果がいかほどであったのかを、ある程度うかがい知ることができるのではないかと思う。

一 浦上春琴との出会い

まず、天保九年（一八三八）八月に、種之助が町奉行に対して提出した願書から見よう。

奉差上願書之事

辻川大庄屋

三木種之助

此度私義要用之義御座候二付、摂州西宮親類共方迄罷越申度、
且兼而病身ニ御坐候二付、彼表ニ而暫保養仕奉願上候、尤御用

向之義是迄通後見江被為 仰付度奉願上候、此様 御聞濟被下
置候ハ、難有奉存候、以上

天保九年

後見

戌八月

三木武八郎

大庄屋

三木種之助

大坂行、右之通願上御聞濟ニ而出立日積いたし居候処、京都春
琴姫路江相見、種之助も姫路江出役長逗留いたし候故、致上坂
候而も年内日数も無之、追々寒氣ニ向候故、来春江相延候相談
之上、西宮行延引仕度段御取次迄申上置候
御奉行様

但、御代官所江も同様相願候

すなわち、種之助は要用につき摂津国西宮の親類方まで行きたい
と願うとともに、かねて病身であるので、同地にて暫く保養したい
と願っている。その際、大庄屋である彼は御用向きについてはこれ
まで通り後見である武八郎へ命じてほしいとも願っている。

この願いは聞き届けられ、種之助は出立するつもりであったとこ
ろ、京都の春琴が姫路に訪れ、種之助も姫路に出張して長逗留した
ため、上坂しても年内に日数もなく、寒気が強まっているので、西

宮行は延期することになったようである。

ところで、右の史料に登場する春琴とは浦上春琴のことである。

彼は江戸時代後期の文人画家である。諸国遊歴の後、二〇代で京都に定住し、頼山陽や田能村竹田ら著名な文人との交わりを深めた。

春琴自身は山水画、花鳥画に優れ、中林竹洞や山本梅逸らと名声を競った人物である。右の史料からだけでは種之助と春琴との関係は判然としないが、実は種之助は姫路に出張するとともに、同地で長逗留して春琴に稽古をつけてもらっていたのである。次にそのことを示す記事を掲げよう。

一 京都画工浦上春琴姫路江相見候二付、種之助参候様下田重次郎殿より申来、種之助九月十日より姫路江行、町宿藤新二逗留いたし、春琴逗留善導寺江日々通致稽古、同月廿五日帰宅いたし、又十月三日二行、同廿一日帰宅、祝義并謝礼等之事
者後素雜費籍ニ委細記有之候

すなわち、春琴が姫路に訪れているので、下田重次郎から種之助へ姫路に来るよう連絡が入り、種之助は九月一〇日から姫路に行き、町宿に逗留して、春琴の逗留先である善導寺に日々通つて稽古をつ

けてもらったのである。同月二五日に帰宅したとあるから、約二週間姫路に逗留し、その間春琴の元に通つたのである。また、一〇月三日に姫路に行き、同月二日に帰宅したともあり、再度二週間以上にも及ぶ期間、種之助は春琴に稽古をつけてもらったのである。その返礼として春琴に祝儀や謝礼などを渡していることも確認できる。

下田重次郎は姫路藩士であり、春琴に文人画を学んだ人物である。連絡を受けた種之助は早速、姫路の宿に春琴を訪ね、金二〇〇疋を支払い、入門の札を取り、姫路坂田町の善導寺に宿を移した春琴の元へ一カ月余り通い稽古を続けたのである。ちなみに、その間に種之助が春琴に支払った謝礼は金四両余りであり、前後の接待なども含めると金六両余りの支出であった。⁽²⁾

種之助が西宮行を延期したのもうなずける。春琴ほどの文人画家に稽古をつけてもらうことなどめつたにあることではなかったろう。それは見方を変えれば、種之助の書画の腕前が、春琴をして稽古をつけるにたるほどのものと判断させたことを物語っている。そのことは種之助が自負するところでもあったであろう。保養を兼ねた西宮行を延期し、病身を押しでの通い稽古であった。種之助の書画に対する情熱のほどがうかがえる。彼もまた文人画家としての性格

を強く持つ人物であったといえるであろう。

二 姫路藩の元家老河合寸翁との交流

さて、種之助が春琴に書画の稽古をつけてもらったこと、そのことから彼の書画の腕前が非凡であったことがうかがえることを述べた。事実、彼の書画の腕前は相当なものであったようで、姫路藩の元家老河合寸翁の聞き及ぶところとなった。次の記事はそのことを示している。

一河合寸翁様より、種之助姫路江出候ハ、被成御逢、詩・書画被成御覽度旨被仰聞候間、詩・書画被認候ハ、可致同道と下田重次郎殿被申候、尤十八日春琴、河合被出候御伺申上、其節同道可致哉と被申候二付、何卒春琴被罷出候節、当分宜之旨頼置候所、御伺之上、十九日午後より三人同道ニ而御屋敷江罷出、持参之詩・書画御覽之上、厚御意被下置、御居間ニ而御酒・御菓子頂戴、御珍藏之古物品々拝見被 仰付候上、御手多宝塔之法帖被下置、晩刺三人同道ニ而下り候、翌日手札ニ而御札申上候由、此様帰宅之上、相咄候次第

すなわち、寸翁から、種之助が姫路に訪れた際に逢い、詩・書画を見たい旨を聞かされたので、詩・書画を作成したのであれば、ともに寸翁に会いに行くべき旨を、種之助は重次郎から申し渡されている。もつとも、当時姫路に訪れていた春琴が寸翁に会うことになり、相談の上で、九月一九日に春琴・種之助・重次郎の三人が一緒に寸翁の屋敷に訪れることになった。その際、種之助が持参した詩・書画を寸翁は見て賞賛し、居間において酒や菓子を振る舞い、珍藏の品々を披露した上で法帖を与えている。

寸翁は、文化五年（一八〇八）に藩主酒井忠実が襲封した際、前藩主酒井忠道の信任によって勝手向を命じられ、財政改革に着手し、大きな成果を上げたことでよく知られている。その一方で、彼は茶道を嗜むなど、文人肌であった。

右の記事は、寸翁の后者の側面をうかがわせるものであるが、春琴のような著名な文人画家とともに、種之助とも交流があったことは興味深い。また、右の記事からは、種之助の詩の腕前も相当なものであったようで、やはり寸翁が関心を寄せるところとなっていたことが知られる。ただし、今回種之助とともに寸翁の屋敷に訪れたのが春琴・重次郎であることからすると、寸翁の関心は種之助の詩

よりも書画にあつた可能性が高い。

寸翁と種之助との接点は、種之助が姫路藩の大庄屋を務めていたことと無関係ではないであうが、種之助の文人としての力量が、寸翁と種之助の交流をもたらしたといえるであろう。そして、種之助の力量は寸翁の期待に十分応えるものであつたことを右の記事は物語っている。

三 姫路藩主酒井忠学への書画の献上

種之助の文人としての力量は、寸翁のみならず、姫路藩主酒井忠学の聞き及ぶところでもあつた。次にそのことを示す記事を掲げよう。

一 殿様、三月廿六日、七種山江御出駕被為有、夫より西光寺野御新開場被遊 御一覽候ニ付、当家御小休ニ被為 仰付候、御同勢上下百八十人計
一 床飾なし、白木三方ニ御熨斗
一 二畳台之上ニ新キ毛氈敷事
一 白木御刀掛

一同御たはこ盆

但し、御上り之たはこ取寄入置火入ニ、池田炭いけ置、きせるハ添不申事、尤御先キ江御揃衆・御坊主衆御出ニ而万事御差図有之候、奥口ハ切、台処より坐敷迄用ユ

一 御奉行長沢小太夫様 金兵衛宅

一 次右衛門宅三間夫々御入、外ニ弔、三軒掃除いたし置事
一 御小休計ニ而御賄者不及用意ニ候様被仰聞候得とも、重箱に肴組、土ひんニ酒之かんいたし、夫々江差出ス、小皿ニにしめ わん玉子 高野とふ、吸物わんニ而茶漬差出ス、下通江ハ安太郎方ニ而白米三斗握飯いたし置候処、御代官吉澤週平様より御賄被下候場処ニ而無之候間、下々江ハ食事決而不相成候様被仰聞いたし置候、握飯出し不申候

一 御殿様甚御機嫌御美敷由御近習より分ケ而被仰聞候 種之助画兼而達御上聞居候趣ニ而、何なり共認置合品差出可申、別様改認候ニ不及と之 御意之由分而被仰聞、在合之画三枚差上候処、為御持ニ相成候由、又々被仰聞候
一 翌日御役人方江御小休之御札ニ罷出候
一 杉ニ而拵候白木之上茶三斤程入、白木之台ニのセ致献上候、

箱之上御煎茶と書、下之処ニ少シ細ク手製と書、折熨斗并小奉書ニ三木種之助と申名札認相添

一種之助大川端迄御出迎、手札上ケ御先江立御案内いたし、御成門之東之方ニ下座いたし居候、御立之節文殊川石橋之北詰ニ於御見送、尤麻上下着用なり、溝口村組境江者後見武八郎罷出、七種山江御供者不致、御立之節者御代官と御一緒御先江御新開場江出張、尤半てんニ野羽織なり

この記事は、天保十一年（一八四〇）に「殿様」に「忠学が七種山へ出駕し、西光寺村内の西光寺野の新開場を視察した際、小休のため三木家に訪れたことについて記されたものである。姫路藩主が大庄屋宅を訪問したということだけでも興味深く、その様子そのものについても注目される。

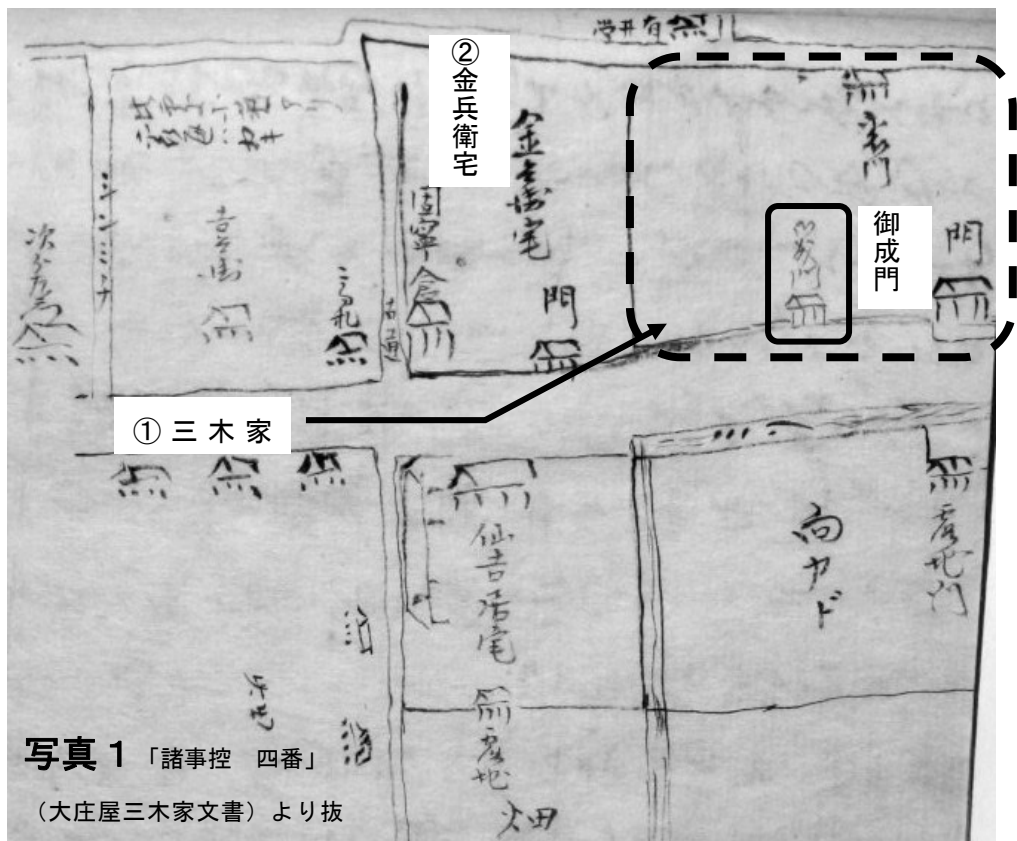
藩主の出駕だけあって、総勢一八〇人ばかりが供をしたことが分かる。右の記事だけでは詳細は明らかでないが、写真1にある①三木家宅、②金兵衛宅、そして次右衛門宅とその他二、三軒に分かれて小休を取ったようである。このうち①三木家宅で小休を取ったのが忠学で、右の記事には忠学への接待の様子が最も詳しく記されている。

一条がそれで、例えば、二畳台の上に新しい毛氈を敷いて忠学の

座に用いている。また、忠学の刀を掛けるために、白木の刀掛が用意されている。さらに、白木の煙草盆も用意されているが、忠学が吸う煙草を取り寄せて火入れに入れ、火入れには池田炭（摂津国能勢郡および川辺郡東谷村一庫などで焼いた上質の炭）を用いている。煙管は忠学愛用のものがあつたのであろう、添えられてはいない。これらの点については予め「御揃衆・御坊主衆」がやってきて、指図されている。なお、三木家宅の使用範囲については、奥口を閉め切った上で、台所から座敷まで使用することになっていたことが知られる。三木家宅で小休を取ったのは忠学以外は近習に限られたであらう。

次に二条に目を移すと、小休であるため賄いは用意せずともよいと聞かされているが、重箱に肴を入れ、土瓶に入れた熱燗の酒をそれぞれ振る舞っている。また、小皿に入れた煮染め・吸い物椀に入れた茶漬けも振る舞っている。また、供の者の多くは街路で待機していたようである。彼らには握り飯を振る舞っている。

三木家による接待の甲斐あつてか、三条からは、種之助は近習から忠学の機嫌がよい旨を聞かされたことが知られる。そして、種之助の書画については兼ねて忠学の耳に入っており、それらを差し出すようにとの、忠学の強い意向も近習から聞かされている。そこで



種之助は在りあわせの書画三枚を差し上げている。忠学はこれら書画が気に入ったようで、持ち帰りたい旨を、近習を通じて種之助へ

① 三木家

② 金兵衛宅

御成門

写真1 「諸事控 四番」

(大庄屋三木家文書) より抜

伝えていいる。種之助の書画の腕前が忠学の耳に入っていたというのは、寸翁を通じてのことかもしれない。いずれにせよ、種之助の書画の腕前は忠学の眼鏡に合うものであったことは間違いない。

続いて五条では、種之助が忠学に茶を献上したこと、六条では、忠学が来訪した際に種之助が出迎え、その後、見送ったことなどが記されている。出迎えの際、種之助は「御成門之東之方」に下座していたと記されているが、ここでいう御成門は、写真1にある①三木家宅に設けられていたものである。残念ながら現在の三木家宅には残っていない。

御成門が設けられていたということは、三木家宅には貴人の来訪が時折あったということを物語っている。それは三木家が大庄屋を務めていたことと大きく関係している。ただし、右に見た忠学の来訪は、種之助の書画について兼ねて忠学の耳に入っていたという記述から判断して、種之助の書画に興味を持った忠学の意向が反映されていたことも十分考えられる。

むすびにかえて

以上、最初の課題設定に従い、「諸事控 四番」を素材に、三木家

と姫路藩主・元家老の文化的交流について明らかにした。そこから
は、種之助は詩や書画の才能に恵まれた文人であったが、特に文人
画家としての性格を強く持つ人物であり、彼と忠学・寸翁の交流は、
彼のそのような文人としての性格に基づくところが大きかったと考
えられる。

今回は「諸事控 四番」から見える範囲に限定して、武士、しか
も藩主と元家老の交流に限定して同家の文化的側面を明らかにした
に止まっている。今後も同家と武士の文化的交流の実態を説明し、
ひいては同家の文化的側面を全体的に解明したいと思う。

(1) 「姫路藩の大庄屋三木家の職務について」(『神戸大学大学院人
文学研究科地域連携センター 平成二一年度活動報告書 共同
研究「辻川界隈の地域歴史遺産掘り起こし及び三木家住宅の活
用基本構想作成」神戸大学大学院人文学研究科地域連携センタ
ー、二〇一〇年)。

(2) 『福崎町史』二 本文編Ⅱ、一五五～一五六頁(竹下喜久男執
筆分)。同書は別の史料を典拠にしており、この他にも三木家と

春琴との交流が描かれているので、参照されたい。